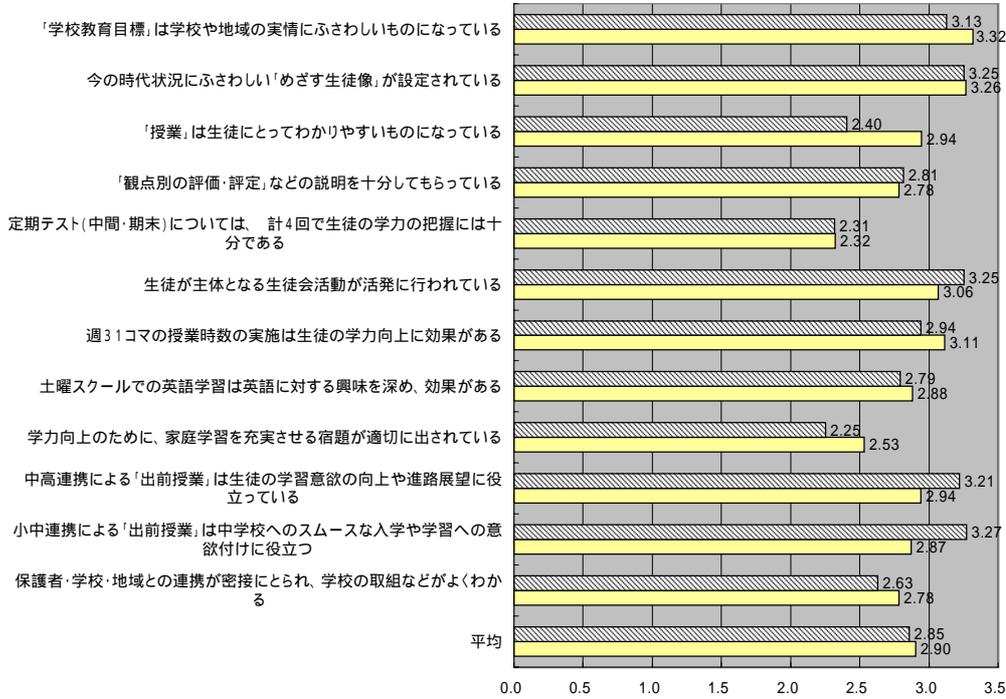


保護者による評価

■ 平成19年5月 ■ 平成19年2月



	平成19年5月	平成19年2月
1 「学校教育目標」は学校や地域の実情にふさわしいものになっている	3.32	3.13
2 今の時代状況にふさわしい「めざす生徒像」が設定されている	3.26	3.25
3 「授業」は生徒にとってわかりやすいものになっている	2.94	2.40
4 「観点別の評価・評定」などの説明を十分してもらっている	2.78	2.81
5 定期テスト(中間・期末)については、計4回で生徒の学力の把握には十分である	2.32	2.31
6 生徒が主体となる生徒会活動が活発に行われている	3.06	3.25
7 週3コマの授業時数の実施は生徒の学力向上に効果がある	3.11	2.94
8 土曜スクールでの英語学習は英語に対する興味を深め、効果がある	2.88	2.79
9 学力向上のために、家庭学習を充実させる宿題が適切に出されている	2.53	2.25
10 中高連携による「出前授業」は生徒の学習意欲の向上や進路展望に役立っている	2.94	3.21
11 小中連携による「出前授業」は中学校へのスムーズな入学や学習への意欲付けに役立つ	2.87	3.27
12 保護者・学校・地域との連携が密接にとられ、学校の取組などがよくわかる	2.78	2.63
平均	2.90	2.85

学校は、教育活動その他の学校運営について、目標(Plan) - 実行(Do) - 評価(Check) - 改善(Action)というPDCAサイクルに基づき、継続的に改善することが大切です。

今、「学校評価」について、多方面からさまざまな議論がなされています。文部科学省が、京都市教育委員会が、下にあるようなガイドラインを出しています。

～義務教育諸学校における学校評価ガイドライン～

を、文部科学省は平成18年3月27日に発表しました。
これによれば、学校評価の目的は3つです。

各学校が、自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき成果やそれに向けた取組について目標を設定し、その達成状況を把握・整理し、取組の適切さを検証することにより、組織的・継続的に改善すること。

各学校が、自己評価及び外部評価の実施とその結果の説明・公表により、保護者、地域住民から自らの教育活動その他の学校運営に対する理解と参画を得て、信頼される開かれた学校づくりをすすめること。

各学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の必要な措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

～京都市の「学校評価システム」ガイドライン～

が今年の4月に出ました。キーワードは「自らを振り返り」、「互いに高め合う」です。
以下に、このガイドラインから大事な部分を抜粋します。

- 京都市の学校評価は、学校・家庭・地域が相互に高め合うことを目指します。

学校評価は、

教職員による自己評価

児童生徒による評価

保護者・地域の皆さんによる外部評価

からなります。これらの「評価」を通して、よりよい学校づくりを行います。

評価は、教職員、児童・生徒、保護者・地域の方々が自らの行動を振り返る機会でもあります。評価を通じて一方的な要求だけではなく、足りないないところを補い合い、学校・家庭・地域が相互に高め合うことを目指します。

学校は評価結果を、必ず保護者・地域の皆様にご公表するとともに、今後どのような点を充実・改善すべきかを皆さんにお示しします。

本校においても、上のガイドラインに則り、「学校評価」を行っています。保護者の皆様からのアンケートも今後の学校運営の参考にしていきたいと考えています。

昨年度は2月、PTA実行委員委員さんに、今年度は5月、休日参観の教育課程説明会参加者に、意見を聞きました。その集計結果は下のグラフの通りです。

このグラフから読み取れる、高い評価をいただいている点は次のようなことです。

「学校教育目標」や「めざす生徒像」は的確に設定されている。

授業はわかりやすくなってきた。

生徒会活動も活発である。

週31コマの授業時数も生徒の学力向上に効果的である。

土曜スクールも英語に興味を持たせるのに効果的である。

小中連携や中高連携の「出前授業」の数値は下がったものの、役立っている。

学校の取組が以前よりわかるようになってきた。

逆に、まだまだ低い評価をされている点は次のことです。

定期テストの回数が少ない。

家庭学習に対応する宿題の量が以前よりは増えているが、まだまだ少ない。

「観点別評価」など、評価に関する説明がまだ十分ではない。